戦後日本における〈家族と住居の近代化〉に関する研究

—千里ニュータウンにおけるケーススタディ—

A STUDY ON THE MODERNIZATION OF FAMILY AND DWELLING
IN POSTWAR JAPAN

—Through the case study in Senri new town—

伊東 康子*, 高田 光雄**

Yasuko ITO and Mitsuo TAKADA

The aim of this article is to verify the modernization of family and dwelling in postwar Japan through the life history method. The data for the investigation is gathered from the interviews with twelve persons and a member of their family who have been living in Senri New Town. The life histories are observed as follows; 1) the detached houses are embodiment of the modernization of housing supply and moreover dwelling style, but on other hand the narrow apartments are temporary, and their residents didn't have the choices of housing chain. 2) the families are not only standard model which consists of husband(breadwinner), wife(homemaker), and two children, but also various types, and nuclear family had experienced diverse dwelling styles with elderly parents for care support in one stage of life course.

Keywords: modernization, prefabricated house, apartment, modern family, life history approach
近代化、プレハブ住宅、集合住宅、近代家族、ライフ・ヒストリー・アプローチ

1. 研究の背景と目的

近年、住まいの「近代化」を問い直す動きが見られるが、その多くはnLDK型プランをめぐる論議である*¹。確かに平面計画の変遷は住宅研究の主要なテーマといえるが*²、「近代化」は幅広い視点から多角的に検証されることが望ましい。また、住宅計画学においては当然の帰結といえるが、従来の研究は住宅から家族へのアプローチであり、家族から住宅を扱った研究はほとんどみられず*³、住宅の「近代化」の背景にある家族像にまで迫ろうとする研究は緒に就いたばかりである*⁴。しかしながら、それらの取り組みといえども、関連諸学の先行知見を援用した理論的考察やマクロデータに準拠する近代化試論であり、それらはまだ検証されていない。

そこで、本研究は、戦後大規模ニュータウン開発の先駆けとなった千里ニュータウン（以下、千里NTと略記）をモデル地区に取り上げて*⁵、高度経済成長期から今日に至る個々の家族の居住過程を追究することにより、まず住宅の「近代化」におけるプレハブ住宅と集合住宅の普及に着目することにより、個々の家族の居住過程を概観した上で、次に家族の「近代化」における「主婦」のあり方に着目することにより、夫婦関係における性別役割分業と、親子関係における老親扶養という2つの主題を設定して、戦後日本における〈家族と住居の近代化〉を敷衍することを目的としている。

2. 研究方法と調査事例の概要

2-1 研究方法

本研究は、個々の家族の居住歴を丁寧に聞き取ることを主眼としている。「インタビュー法」による事例研究は、これまで人類学、心理学、社会学等*⁶の分野において一定程度の研究蓄積があるが、必ずしも調査・分析手法が確立されているわけではなく、もっぱら研究者の資質に負うところが大きいとされてきた。ところが、近年、大量観察では得難い質的なデータを重視する傾向とともに、その方法論も言及されつつある。とりわけ有末賢の「ライス・ヒストリー・アプローチ」*⁷は、マクロな社会変動とミクロな生活状態史との混合的把握を目指すものである。また、谷富夫の「ライフ・ヒストリー法」*⁸は、「ライフ・ヒストリーを生活構造の持続・変容過程として捉えよう」とするものであり、個性記述と仮説索出を目指すものである。両者のそれは、本研究の問題意識と合致し、個々の居住歴を具体的に把握する有効な手法と考えられる。そこで、それらを参考にして、本研究では、①フィールド及び調査対象者の選定、②居住歴（家族と住居の変化）に関わる質的データの収集、③データの編集による居住歴の構成、④それらの解釈による事例の類型化、⑤時代・社会のコンテクストからみた再解釈、という手順を踏むことにより、以下の考察を行った。

* 京都大学大学院工学研究科 博士後期課程・修士(生活科学)
** 京都大学大学院工学研究科 助教授・博士(工学)

Graduate Student, Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., M. Liv. Sci.
Assoc. Prof., Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., Dr. Eng.

2-2 調査事例の概要

まず千里NT居住者を対象とするアンケート調査^{*9}を実施して、インタビュー調査への協力を呼びかけた。インタビュー調査受託者104名の中から基本属性の偏りを考慮しつつ、30名を選定した。後期高齢者は別途実施したグループ・インタビュー調査^{*10}の回答者11名の中から3名を選定した。面接にあたっては、夫婦関係、親子関係を中立的立場で聞き取るために、協力を得られる限り複数の当事者へのインタビューを心がけた。調査時期は、1997年1～3月である。

本研究の主旨からいって、千里NT初期における居住を経験していることが肝要であるとの判断から、上記33名のうち居住歴25年以上で、住宅と家族の変化が明確に把握できた12事例を、以下の考察対象とした。

再構成した12のライフ・ヒストリーの全容を提示した上で、論点を絞って考察を進めていくのが常套手法であるが、本稿では、紙幅の制約上、表1に調査事例の現況、表2に入居時からの住宅と家族の変化、図1にプラン（プライバシーへの配慮からモデル化している^{*11}）をまとめて表示し、以下の考察では、個性既述に必要と考える箇所のみ当事者の言葉を「」で記している。なお、（ ）は筆者による補足事項である。

3. 12家族の居住過程

本研究は、住宅工法の「近代化」に着目したことから、以下では、在来工法戸建住宅、プレハブ戸建住宅、集合住宅の3タイプに分けて考察を進める。

3-1 在来工法戸建住宅

＜O1＞ 夫は入社当初から海外勤務が多く、東京では社宅暮らしであった。1962年、夫がニューヨーク勤務の時、妻の父（大阪在住の大学教授）の紹介で、宅地を購入した。「2年以内に住宅を建築しなければならない」という条件だったので、東京に残っていた妻が、知り合いの若い大工に施工を依頼した。完成後も、東京と海外を往復する生活が続いたため、「妻の姪夫婦を住まわせ」、管理を任せていた。姪夫婦が出ていった後も、「庭師は年2回頼んでいたし、妻が日本に居る時は、東京から月1回は通って、窓を開けて風を通す」等維持管理を心がけてきた。

1991年、発病した妻の希望で、夫は退職し、夫妻で千里NTに移ってきた。「寝室は和室なので、応接間に介護用ベッドを入れて、妻の寝室にした」。建て替えを検討したが、「独立したてで採算を考えずにやってくれたのだろうが、檜の柱であることが分かったので、建て替えるのを止めて、書斎を増築する」ことにし、元の大工に依頼した。1995年、「妻のリハビリのために、バスやトイレに手すりを付けたり、床の段差をなくす等改造する」ことにしたが、「神戸の長田（阪神・淡路大震災の大被災地）に住んでいた大工と音信不通になってしまった」ため、別の工務店に依頼した。

＜O2＞ 夫の両親は、満州から引き上げてきて、大阪市内（住工混在地域）で医院を開業していた。「もっと空気のきれいな所に住みたい」との思いから、夫の母が申し込み、1964年、6回目の宅地分譲に当選した。設計は、夫が知人の建築家に依頼した。完成後も、父は医院に留まり、週末のみNTの自宅で過ごしたが、「当時は近所でも別荘として使っていたお宅も多かった」。

1968年に、結婚が決まり、「2階に主寝室と和室を増築したい」

ということで、知り合いの工務店に施工を頼んだ。1981年、大がかりな増改築をすることになり、元の建築家に設計を依頼した。玄関脇に妻のピアノレッスン室をつくり、夫の母の部屋を1部屋（トイレ・洗面付き）増築して、2間続きとした。「狭くて使いにくかった」水まわりと台所も広くして、その続きに納戸も造り、パティオを洋室化して、DをLDから独立させた。2度に渡る増改築で「当初のモダンなデザインの良さがなくなってしまった」。

＜O3＞ 結婚前は、夫妻とも大阪市内に住んでいた。1967年、夫が宅地分譲に当選した。夫、母、妹弟が入居した翌年に結婚、同居した。夫が「木造は腐るから鉄筋にしたい」と、知り合いの工務店に施工を依頼したが、「雑誌を見せて注文したら、そのとおりに作ったので、南面にトイレやお風呂があって、北側に居間があるという変な住宅になってしまった」。

1983年、和室を1部屋増築して、夫の母を引き取った。増築部分は木造であるが、「外観は吹き付けにして、その差が目立たないように仕上げてもらった」。1993年、洗面所の壁の中で水漏れが起きたので、「結婚以来ずっと使いにくい」と思っていたLDKも一緒に改築した。日当たりのよい南面にリビングをとり、北側に対面キッチン、その続きに水まわりを配置した。「快適になったが、煮炊き物の臭いがリビングに流れたり、来客時にキッチンまわりのごちゃごちゃが見えるのが気になる」ので、夫の来客は、玄関横の和室を使っている。

以上のように、一般注文住宅は、敷地規模もかなり大きく、大阪市内からの住み替えニーズに対応した住宅であった様子が観察された。また初期のロンドン郊外と同様、自営層のウィークエンド・ヴィラ^{*12}として利用されていた様子も伺われる。

その後の経過は、いずれも敷地にゆとりがあることから、家族の成長や変化に合わせて増改築を行っており、その施工にあたっては当初からの付き合いを重視する傾向がみられる。

3-2 プレハブ戸建住宅

＜P1＞ 大阪市内の2階建木造住宅に母娘3人で住んでいたが、「戦火を避けられたために周りは古く建て詰まっていたのを、母は嫌がっていた」。そんな折り、千里NTの分譲を知って、1963年、「女なので騙されてはいけない。家と土地が一緒なら安全と思い」、プレハブ付分譲（S社・平屋建）に申し込んだ。「抽選もなかったが、2階建が出来なかったし、広さも自由に変えられなかった」。数年後、アルミパネルの屋根は「暑いし、見栄えがよくなかった」ので、新商品を奨められて「葺き替えた」。その後は「仕事中心の生活がずっと続いたので」、手を入れずにきたが、「定年で在宅するようになると、原稿を書くための書斎が欲しくなり」、1989年、庭にサンルームを増築した。その翌年、「家に居ると、台所も気になり始めて」、DKを改造して、システムキッチンを入れた。

＜P2＞ 結婚が決まった時点で、「新聞に発表されたマスタープランを信用して」、夫が申し込んだ。1963年、2回目のプレハブ付分譲（S社・平屋建）に当選し、新婚当初から住み始めたが、当初の住宅は「屋根や天井が低くて、冬は暖かかったが、夏はとにかく暑かった」。

1971年にドイツから帰国後、プレハブで2部屋増築した。その5年後に、「広さは十分だったが、2階建にしたい、夏が暑い、（材

表1 調査事例の概要

* < P 2 > は当初プレハブ住宅であったため、Pと表示している。

事例	入居年	住宅タイプ	敷地	住戸	世帯構成	夫の職業	妻の職業	面接協力者
O1	1964	戸建・木造	150坪	35坪	夫(75)妻(71)	元商社役員	専業主婦	夫
O2	1965	戸建・木造	145坪	74坪	夫母(85)夫(61)妻(53)長男(26)	公立病院副院長	専業主婦	妻、夫母
O3	1968	戸建・RC造	138坪	53坪	夫(55)妻(54)長女(28)次女(26)長男(24)	公務員	栄養士(パート)	妻
P1	1963	戸建・プレハブ	100坪	31坪	姉(71)妹(69)	姉—元公立研究所員	妹—専業主婦	姉
P2	1963	戸建・木造	100坪	44坪	夫(61)妻(57)長男(19)	会社常任顧問(化学)	専業主婦	夫、妻
P3	1967	戸建・プレハブ	75坪	37坪	夫(67)妻(67)	元中学音楽教師	元学校図書館司書	夫、妻
P4	1970	戸建・プレハブ	80坪	30坪	妻(65)	亡夫元民間研究所員	専業主婦	妻
P5	1970	戸建・プレハブ	80坪	42坪	夫(64)妻(58)夫母(94)	元会社員、商店自営	公務員(市嘱託)	妻
A1	1966	集合・公団	—	47m ²	夫(57)妻(53)長女(12)	前会社員、自営	会社員(旧公社)	夫
A2	1967	集合・民間	—	80m ²	夫(72)妻(68)	元会社員(化学)	専業主婦	夫、妻
A3	1967	集合・民間	—	80m ²	夫(66)妻(57)妻母(95)	元会社員(化学)	専業主婦	妻
A4	1970	集合・民間	—	73m ²	夫(55)妻(40)	前商社員、病院事務	大学職員(アルバイト)	夫、妻

図1 プラン一覧

表2 居住過程一覧

<O1>		
年	住宅	家族
1962	宅地購入	夫ーニューヨーク、妻子ー東京
1964	□木造新築	↑
	↑	この間の大半、 夫ー海外、妻子ー東京
	この間、 社宅(東京)	↓
1989		妻発病、夫退職
1991	◇書斎増築	夫妻東京から転居
1995	◆バリアフリー改造	
<O2>		
年	住宅	家族
1964	宅地分譲当選	夫父母・夫・夫妹入居
1965	□木造新築	×夫父死去、夫妹結婚、離家▽
1967		○結婚、同居
1968	◇2階2部屋増築	○長男誕生
1970		○次男誕生
1971		
1981	◇◆1階3部屋増改築	△次男大学進学、離家
1990		
<O3>		
年	住宅	家族
1967	□宅地当選RC造新築	夫母・夫・夫妹弟入居
1968		○結婚・同居
1969		○長女誕生
1970		▽夫妹結婚、離家
1971		○次女誕生
1972		○長男誕生
1976		夫弟独立、夫母同行
1983	◇和室(木造)増築	▼夫母引き取る
1986		×夫母死去
1993	◆LDK・水まわり改築	
～1995		夫単身赴任
1996		夫帰阪
<P1>		
年	住宅	家族
1963	□フレハブ付分譲購入	母・姉妹入居
同年		×母死去
1967		姉留学、妹同行
同年	□別棟新築	末妹家族転居
1968		姉妹帰国
1989	◇書斎増築	
1990	◆DK改築	
<P2>		
年	住宅	家族
1963	□フレハブ付分譲当選	○結婚、入居
1964		○長女誕生
1967		○次女誕生、夫ドイツ転勤
1968		妻子ドイツへ同行
1971	◇2部屋増築	帰国
1976	■木造に建替	
1977		○長男誕生
1987		▲長女就職、離家
1993		▽次女結婚、離家
<P3>		
年	住宅	家族
1965	宅地分譲当選	
1967	□フレハブ新築	夫母・夫妻・長男・長女入居
1976	堀込ガレージ建設	
1978	◇和室(木造)増築	
1981		△長男大学進学、離家
1982		×夫母死去
1984		▽長女結婚、離家

<P4>		
年	住宅	家族
1969	□フレハブ付分譲当選	
1970		夫妻・長男入居
1983	◇1部屋増築、 ◆DK・水まわり改築	
1982		▲長男就職、離家
1992		夫入院
1995		×夫死去
<P5>		
年	住宅	家族
1969	□フレハブ付分譲当選	
1970		夫妻・長男・長女入居
1972	ガレージ手作り	
1980	◇2階1部屋増築	
1986		▲長男就職、離家
1990		▽長女結婚、離家
1992	◆1階改築	
1995	◆トイレ改造	▼夫母引き取る
<A1>		
年	住宅	家族
1966	公社賃貸当選	夫父母・夫入居
1971	□建売住宅購入 (高槻市)	夫のみ転出
1974		○結婚
1979		×夫父死去
1982	■公団中古購入、 建売住宅売却	夫妻転居
1984	□公社中古購入、 公社賃貸解約	夫母転居
1985		○長女誕生
<A2>		
年	住宅	家族
1967	□社宅分譲購入	夫妻・長女・長男入居
1969		夫名古屋転勤、妻子同行
	↑ 借上げ社宅	(▽長女結婚、長男進学△)
	↓	
1978	◆水まわり改築	夫妻再入居
1981		長男就職・帰阪
1982		▽長男結婚、離家
<A3>		
年	住宅	家族
1967	□社宅分譲購入	夫・前妻・長男・次男入居 (×前妻病死)
1974		○再婚
1984		▲長男就職、離家
1987		▲次男就職、離家
1993	◆居室改造	▼妻母引き取る
<A4>		
年	住宅	家族
1970	公団賃貸当選	○結婚、入居
1972		○長男誕生
1973	□民間マンション購入 (NT周辺)	転居
1980	□民間中古マンション購入	●離婚、夫転居
1983		○再婚
1985		海外駐在
1986		妻父母同棟へ転居
～1989	空家賃貸	
1989		帰国
～1996		夫単身赴任
1997		夫転職・帰阪

凡例
□…新築or購入
■…建替or転売
◇…増築
◆…改築・改装
◎…結婚
●…離婚
○…誕生
×…死去
△…就学下宿
▲…就職離家
▽…結婚離家
▼…老親引取

木商だった)父の材木を使いたい」等の理由から、2階建木造住宅に建て替えた。

＜P3＞ 結婚後に豊中市にある公団の賃貸住宅に入居したが、子供が産まれて、夫の母を呼び寄せて同居を始めた。1965年、宅地分譲に当選した。「設計は素人には分からないから、出来た物でよい。大手の業者なら信用できる」と思い、プレハブ住宅(D社・2階建)に決めた。

「市の指導に従って、周囲を生け垣にして、矩面も土のままにしていたが、大雨が降る度に土が流れ出す」ので、それを防ぐ目的で、1976年、掘り込みのカレージを造った。その2年後、ガレージの上に木造の和室(トイレ、洗面付)を増築した。「母の隠居部屋のつもりだったが、母は寂しいと言って、あまり使わなかった」。

＜P4＞ 結婚後、豊中市にある公団の賃貸住宅に入居していた。1969年、プレハブ付分譲(N社・平屋建)に当選し、翌年入居した。「プレハブの外観が嫌で、木を植えて、外から目立たないようにしていた。5年ぐらいで建て替えようと思いながら、息子の受験等でそのままになっていた」。

1983年、縁側とベランダを潰して、木造の和室を増築し、トイレ、浴室の改装と、DKの東側面に窓を開けた。「庭が狭くなったが、来客を泊めることができるようになったし、DKが明るくなった」。一人息子が独立して、夫と死別した現在、「庭の手入れが大変な戸建から集合住宅へ転居する」ことも思案中である。

＜P5＞ 結婚当初、夫の母が所有する借家に住んでいたが、子供ができて手狭になり、夫の母の住宅へ移って同居していた。4回申し込んで、1969年、プレハブ付分譲(N社・2階建)に当選し、翌春、入居した。「千里にこだわったのは、ガス、電気、上下水道と、散歩道がある所に住みたかった」からである。

入居後、妻が運転免許を取得し、夫の通勤時の送迎を始めた。カレージは夫が1年がかりで手作りで作った。1980年に、夫の母が「同居する時の部屋が欲しい」と言って、2階に和室とトイレとミニキッチンでプレハブを増築した。その後も、夫の母は一人暮らしを続けたが、「震災をきっかけに引き取った」。現在、夫婦が2階の居室を使用し、夫の母が1階の居室を使用しているが、「玄関脇の洋室と和室を続き間に改築したため、独立した接客空間を確保できなくて、困っている」。

以上のように、プレハブ住宅に対するニーズは、工業化、一体化等供給システムを積極的に評価するタイプと、宅地・住宅取得が最優先で、たまたま当選したという消極的受け入れタイプとが観察された。また、インフラが整備された居住地としての千里NTへのこだわりもみられる。いずれの場合も、プレハブ住宅は主として一次取得者のニーズに応えたものであったといえる。

その後の経過は、1ケースは、父親が扱う材木への思い入れが強く、早期に木造住宅に建て替えたが、他のケースは増改築で対応している。初期のプレハブ住宅は25坪程度の平屋建であったため、家族成員数が少ない場合でも1部屋は増築されている。数年後には、2階建プレハブが供給されて延床面積は拡大していくが、親との同居を前提に1部屋増築が行われている。ただし、プレハブによる2階増築は1ケースのみとなっており、プレハブ工法本来の利点を活かすような増改築はほとんどなされていない。

3-3 集合住宅

＜A1＞ 夫は両親と宝塚市に住んでいた。「父の通勤の便を考えて」、NT内の住宅を申し込んでいたら、1966年、公社の賃貸住宅(2DK)に当選したので、転居してきた。

「戸建住宅に住みたいと申し込みを続けたが、当たらない」ので、1971年に高槻市(同じ北摂地域)の建売住宅を購入した。父親から援助してもらったが、「父は通勤が不便だと言って、移って来なかった」。結婚し、父親が死去した後、1982年に公団の中古住宅を購入し、建売住宅を売却して、千里NTに戻ってきた。母親も公社の中古住宅を購入し、公社の賃貸住宅から住み替えた。現在、狭小、老朽化した両団地で建替話が持ち上がり、「どちらか一方でも建替がスムーズにいけば、同居可能な広さを確保できる」のであるが、両団地とも居住者の合意形成が難航している。

＜A2＞ 結婚後、西宮市の社宅に入居していた。1967年、社員に分譲された社宅(3LDK・80㎡)を購入した。2年後に、名古屋に転勤になったが、「会社が借り上げ社宅にしてくれた」。

名古屋から戻った1978年に、台所と風呂を改装した。住棟の維持管理は、「ベランダの塗装は5年に1度、外壁の塗装を10年に1度、配水管の清掃は毎年行っている。矩面の草刈りや植木、芝生の手入れは、みんな年をとったので、最近業者さんに頼んでいる」。

＜A3＞ 1967年、＜A2＞とは別棟の住戸を購入した。「住戸や階段がずらして配置されているし、1階のピロティのサイドには各戸に3帖大の物置もあるし、敷地もゆったりしていて、各戸に1帖大の花壇もあるのが気に入っており」、住棟の維持管理も「管理組合の営繕を担当する」等、積極的に関わっている。

1993年、妻の母を引き取ることになり、「母に玄関横の1部屋を渡すために」、和室2室を洋室化して、LDKをDKと居間(和室)に改装した。

＜A4＞ 1970年、公団の賃貸住宅(2DK)に当選したので、結婚し、入居した。3年後に、「子供ができて、狭い」ので、上新田(千里NTの隣接地区)にある民間分譲住宅(3LDK・85㎡)を購入した。その後、妻と離婚することになり、夫は、民間分譲の中古住宅(2LDK・73㎡)を購入した。その後、夫は再婚したが、海外駐在や東京への単身赴任が続き、内装は手を付けていない。

以上のように、当初の集合住宅は、供給主体に関わらず、住戸規模が2DK・50㎡未満の住戸が大半であったが^{*13}、それらは結婚による若年世帯の新規需要に応えるものか、持家取得までの一時的受け皿住宅であった様子が観察された。

その後の経過は、当初、公的賃貸住宅に入居した2ケースのうち、1ケースは戸建持家志向でありながら、千里NT内の戸建住宅の抽選にもれ、狭小な集合住宅を2戸取得した。もう1ケースは、当時のサラリーマンと比べて、早期に分譲集合住宅に住み替えており、戸建志向はみられない。社宅分譲の2ケースは、住戸規模にゆとりがあつて、家族成員数も標準(夫婦と子ども2人)であったためか、集合住宅を受け入れ、住みこなしてきたといえよう。

4. 居住過程における家族の「近代化」

4-1 夫婦関係

近年の家族社会学やジェンダー研究の成果は、戦後日本における家族のライフスタイルの特質として既婚女性の専業主婦化を指摘す

る^{*14}。また、夫婦関係における性別役割分業観は夫妻の職業によってかなり異なることも指摘されている^{*15}。

それら知見を踏まえて、本研究では妻の就労形態と「主婦」規範に着目して考察した結果、次の5タイプの存在が観察された。

①専業主婦（キャリア）

<O1>、<P2>の妻は、高度経済成長期の日本の経済発展を担った企業戦士の夫を支えて、家庭を守り、夫の海外赴任にも同行した^{*16}。とりわけ<O1>は住宅取得まで妻1人でやり遂げた。海外に居た夫は、「妻が必要という金額を送金しただけ」である。妻は「専業主婦」に誇りと責任を持っており、それが療養中の現在、裏目に出ている。「妻は他人が家に入るのを嫌がるので、ヘルパーの派遣を利用できないし、息子2人も海外勤務で、日常の家事を嫁に期待できない」という訳で、夫は、料理教室へ通って、日常の食事づくりを習得し、妻の介護も担っている。

<O2>、<P4>の妻は、夫の研究生生活（新築時に書斎を確保）を支えて、子どもの教育から家庭、地域の事など一手に引き受けてきた。両者とも「主婦が外に出て働くことは考えなかった」。<O2>は「自宅でピアノを教えながら、共働きの同級生の子どもの面倒をみてきた」。<P4>も「子育てをしながら、図書館づくり運動に関わっていた」が、子どもが手を離れた後は、「英会話・染色・織物等趣味のサークル活動を通じて」友人の輪を広げてきた。

<P1>は、姉妹世帯である。姉が夫役割＝一家の稼ぎ手、病弱な妹が妻役割＝家事を担ってきた。姉は、「研究所で男性と対等に仕事をやっていくために、男性以上に仕事中心の生活を強いられてきた」が、定年後、「初めて家庭生活を楽しむゆとりができて」、家事にも関わるようになった。

これらのケースは、いずれも夫の経済的もしくは社会的地位が高く（表1、夫の職業欄参照）、妻の家庭外就労は必要とされず、むしろ妻が家庭における私設秘書の役割を担うことで、夫は公私領域にわたって仕事に専念できたと推察される。このような夫婦関係は、カップル単位（ミクロ）でみれば、戦後日本の社会システムの要請に応えた夫妻のパートナーシップといえるが、社会全体（マクロ）からみれば、公私領域における明確な性別役割分業の体现であり、それが戸建持家層においてとりわけ明確に表れたといえよう。

②専業主婦（一般）

<A2>と<A3>の妻は、高度成長期における所得増加を背景にして専業主婦となり得たタイプといえよう。夫を支えて夫婦で1つのキャリアを追求してきた①と比べると、専業主婦の大衆化傾向が伺える。とりわけ「会社が研究所の社宅用地として確保していたが、研究所を別の場所に建てたため、一般社員に分譲された」幹部社員用社宅の分譲によって、良質な住宅を取得できたことが、70年代後半以降、家計補助目的のパート就労が増加する中で、専業主婦でやってこられた要件の1つと考えられる。

③専門パート主婦

<O3>の妻は、長男が3歳になった時に幼稚園に入れて、その幼稚園で栄養士として働くようになった。「ずっと働くならフルタイムの方が良かったかも知れないが、近所だったこととパートだったことで続けられたと思う」。その間に妻の両親が死去し、夫の母の面倒もみた。「みんな短期間だったし、幼稚園の休みともうまく重なり、仕事を辞めずに何とか乗り切ってきた」。

<P5>の妻は、「子育てが終わって、何かやりたい」と思っていた折り、近くの保育所で保母のパート募集の張り紙を見つけ、市の臨時職員として勤め始めた。その後、高齢福祉課の嘱託として勤務している。しかし、退職した夫が昨年から家具店を始めて、「休日は店を手伝っているし、夫の母を引き取ったこともあり、そろそろ辞めようか」と考えている。

この両者は、妻の就労に夫はまったく関与しておらず、あくまで妻は家事を優先し、残りの時間内で仕事に従事してきたといえる。また、いずれも専門職＝専門学校あるいは短大において資格取得可能一ではあるが、従来から女性向きの職業とされてきたものであること、また職場がNT内もしくはNT周辺に位置したことも就労を可能にした要件であろう。

④共働き主婦

<P3>と<A1>の妻は、教員や公務員に多いとされる典型的な共働き主婦である。<P3>は、夫が中学教師、妻が学校図書館司書である。一般的に農村では嫁は一家の働き手であったことから、郷里から呼び寄せた夫の母が家事を担い、妻が外で働くことは当然視されたが、夫が家事や育児を引き受けることはなかった。大阪生まれで、「自立的な生き方を望んでいた」妻は、「夫の母に家事を任せることで仕事が続けられた」と述懐しており、日本の伝統的な親族支援を得たことにより継続就労を実現してきたといえる。

<A1>の夫は、転職を繰り返した後、数年前に独立した。妻は旧公社職員であり、共働きを続け易い職場であった。「共働きだったので、子どもが遅くなってしまった」という夫の発言からも、妻の就労によって住宅取得を目指した様子が伺われる。

この両者は、夫婦関係において妻が経済的な役割を分担しているという点で、専業主婦やパート主婦とは大きく異なっている。既婚女性の継続就労を支える基本要件の1つは職住近接であるが、通勤に便利な千里NTは、専業主婦ばかりでなく、共働き主婦にとっても住み易い環境であったといえる。

⑤キャリア・脱主婦

<A4>の前妻は長男を出産後、「医者になると言って、予備校に通い始めた」。それで、夫が「育児に関わるようになり、長男を保育所に預けたが、商社の仕事は夜も遅くなるので、保育所が終わった後は近所の人に見てもらったり大変だった」。その後、長男は妻の実家で祖父母に育てられ、結局、離婚に至った。しかし、夫は、前妻の医者としての生き方を認め、自らも「収入よりも生きがいのなる仕事をしたい」と、キリスト教系の病院に転職したばかりである。再婚した妻は、夫の海外赴任にも同行したが、帰国後、夫の単身赴任中に、大学職員のアルバイトを見つけ、「少しでも社会に役立つことができれば」と、その後も契約を更新してきた。

このケースは、夫が妻の就労を、とりわけ前妻のキャリア志向を個人の生き方として受容している点に、夫婦関係におけるジェンダー意識の変化が読みとれる。

以上から、既往研究や各種調査におけるマクロ・データによる分類は、専業主婦、パート主婦、共働き主婦の3タイプが一般的であったが、千里NTの持家層においては、専業主婦とりわけ「専業主婦（キャリア）」の存在とその特徴が観察された。また、家計補助が主目的とされる単純・周辺労働に従事するパート主婦が観察されなかった反面、自己実現的な理由による専門的職種に従事するパー

ト主婦の存在も観察できた。さらに、共働き主婦は本人の意志に加えて、夫の経済的役割期待に応えた就労であり、とりわけ住宅取得にそれが反映されることも観察できた。なお、妻の就労を人間の生き方として受容する夫の存在は、ジェンダー問題を扱う場合に、妻だけでなく夫も含めて論じることの重要性を示唆している^{*17}。

4-2 親子関係

家族社会学者の森岡清美は、戦後の近代的家族の日本的典型として、老親に対する既婚子の同居型扶養をあげる^{*18}。

そこで、本研究においても、老親扶養をめぐる同別居形態とそれに関わる嫁規範に着目して考察した。入居直後に母親が急死した<P1>を除く11ケースのうち、別居でかつ老親扶養を経験していない核家族は<O1>、<P4>、<A2>であり、老親扶養をめぐる以下の6タイプの存在が観察された。

①嫁姑継続同居

<O2>の妻は、結婚以来、夫の母と同居してきた。「夫の母が民生委員をしており、家を空けることが多かった」ので、妻が家事全般を担ってきた。「部屋数が11と多いから、始終顔を付き合わすこともなくて、同居でもやってこられた」という妻と、「若い人のすることに口を出さないようにしてる」という夫の母の発言は、長年の同居における微妙な嫁姑関係を言い得ていると思われる。

②嫁姑一時同居

<O3>の妻は、結婚当初と夫の母の最期に同居を経験している。先述のとおり、夫の母の介護期間が短期であったことが、パート就労を中断させることなく、嫁役割もこなすことができたということであろう。

<P5>の妻も、結婚当初の一時期に同居を経験し、近年、夫の母を引き取った。「将来、長男と同居するにしても、嫁が可哀想なので、家事の分担は最初に話し合っ、ルールを作りたい。自分は子育て期に核家族を経験できて良かった」という発言からも、女性＝嫁という意識は払拭できていない。

③家事支援姑呼び寄せ同居

<P3>の妻は、「当時は子供を保育所に預けて働くことは難しかった」という訳で、郷里から呼び寄せた夫の母に家事や子育てを任せることにより、共働きを継続してきた。「夫の母は亡くなる前夜まで普通に生活しており」、夫妻は親の介護を経験していない。はからずも若年世代の家事・子育て支援の同居であったといえる。

④長男の嫁優先別居

<P2>の妻は、別居ではあるが、「自分のきょうだいが多かったので、長男の嫁の立場を優先してきた」。木造に建替えて以来、「お正月に夫の実家へ出向いていたのを止めて、夫の親きょうだいを迎えることになった」。建替え時に、「年寄り部屋を作っておいた」が、夫の母が一時期使用しただけである。両親の介護は「夫の仕事が一番大変な時期で、長男もまだ小さかったので、病院に入院させて、家政婦さんを付けた」。これは、夫の経済的余裕に裏付けられた選択であったといえよう。

⑤妻（娘）介助同居

<A3>の妻は、前妻が急死した後に再婚して、「自分の子どもは作らずに、息子2人を育てた」。妻の母は、長野の兄と同居していたが、「兄が死去し、兄嫁も年なので」、3年前に引き取った。

自分の子どもを育ててくれた妻に対する夫の感謝の気持ちが、妻の母を自然に受け入れることにつながったのであろう。

⑥夫（息子）介助別居

<A1>の夫は、両親の面倒を見てきた。父親の最期も「亡くなるまでの3年間は、千里に寄ってから高槻に帰る毎日だった」。現在、母親が股関節の手術を受けて、退院後もリハビリのために通院しており、夫がその送迎をしている。先述のように、妻のフルタイム就労により住宅を取得できたこともあり、親の介護まで妻に頼めないというのが実状であろう。

<A4>の夫は、岡山に要介護の両親を抱えている。父親は施設に預けているが、母親は近所の人たちの手助けと訪問介護に頼っている。夫は、母親の世話をするために度々新幹線で往復しており、「できれば母親を引き取りたい」が、「再婚した妻の両親が同棟内へ転居してきたこともあり、まだ結論を出していない」。キャリア志向の前妻の生き方に理解を示した夫が、再婚した妻に嫁役割を転嫁することはまずあり得ないと思われる。

さて、マクロ・データをベースとする既往知見では、戦後、とりわけ大都市周辺では核家族が優位とされてきた。確かに千里NTの持家層においても、生殖家族を形成後、老親扶養の経験がない核家族の存在が観察された。その一方で、森岡が指摘したように、養育期には核家族形態をとっても、老親介護が必要となった折りには一時的同居を選択する様子が確認された。だが、それは主として個別の住宅更新が可能な戸建持家における選択であって、集合住宅の場合には苦慮するケースも観察された。また近年では、先述の夫婦関係とも関連するが、夫が夫の親、妻が妻の親を介護する傾向→双系化もみられ、居住スタイルがより多様化しつつある様子が伺われた。

5. まとめ

本稿のねらいは、千里NT居住者のライフ・ヒストリーを通じて、戦後日本における<家族と住居の近代化>の実像に迫ることであった。12家族の居住過程を追うことは、結果的に戦後の住宅「近代化」を巡る論点を顕在化させた。千里NTの再生はもちろんのこと、これからの住宅計画を考える上で、とりわけ以下の点は示唆深い。

- 1) いわゆる「住宅双六」の上がりとは「郊外庭付戸建住宅」とされてきたが、まさに平均100坪の宅地に建つ戸建住宅はその体現であった様子が観察された。とりわけ夫婦関係における「専業主婦(キャリア)」の存在とその明確な性別役割分業像が浮かび上がった。
- 2) 一部の住戸・敷地規模にゆとりがある集合住宅で定住意向が観察された一方、50㎡未満という小規模住戸の集合住宅群では、家族の成長・変化による住み替えを必要としたにも関わらず、千里NT内における「住宅連鎖」の選択肢が不十分であった様子が伺えた。
- 3) 戸建住宅、集合住宅居住者とも基本的にLDK型プランを受け入れている様子が伺われた。増改築にあたっては、戸建住宅では多目的に転用できる和室の増築が目立ったが、在宅介護が必要となった折りには、寝室の洋室化、居室の独立性を望むケースが観察された。
- 4) 深刻な住宅不足解消のために一度に大量供給された住宅は画一的、静態的^{*19}であることを余儀なくされたが、居住主体である家族は、戦後住宅計画の標準モデルとされた夫婦と子ども2人という養育期の核家族は当然のことながら、多様なタイプの存在が確認された。
- 5) マクロ・データでは核家族と扱われる場合でも、ライフステージ

の一時期において老親扶養に関する多様な居住スタイルの展開が確認された。その際、戸建住宅よりも住宅改善に関して制約が多い集合住宅では、老親介助に苦慮するケースが観察された。

6) 後発の郊外ニュータウンは、その遠隔化に伴って通勤問題が社会問題にまでなったが、大阪市内や北摂地域への通勤が便利な千里NTは、専業主婦の家族だけでなく、共働き主婦の家族にとっても住みやすい居住環境であった様子が伺われた。

謝辞：本研究をまとめるにあたり、貴重な資料を提供いただいた供給主体と、プライバシーに関わる調査であるにも関わらず、研究の主旨に理解を示し、協力いただいた居住主体に感謝申し上げる。

注：

*1 学会関連では、大会研究協議会「住まいの近代化」（1989）、春期学術研究会「ポスト・モダンリビングの成立をめぐる」（1991）、『建築雑誌』の特集「ゆらぎの中の家族とnLDK—戦後日本の家族と住宅」（1995.4）等がある。

*2 ハウジングスタディグループは、「都市LDK型」、「集合住宅型」、「地方続き間型」の3タイプによる現代住居の流れを考察している（文献1）。住田も、「続き間型」と「LDK型」をキー概念とする仮説を示し、地方都市も含めて精力的な研究を展開している（文献2）。

*3 伊東・広原は、社会構造の変化とともに住宅計画の基本としての家族像が揺らいでいるとの共通認識がある中で、そのような課題に応じていくには、隣接諸科学の理論・方法論等を積極的に取り入れていく必要性を提起している（文献3）。また、小林は、従来の住宅計画学の研究方法では家族の心理的問題を扱うには限界があることを指摘し、住宅空間構成を解明するための新しい方法論を提起している（文献4）。

*4 以下の取り組みがある。伊東は、戦後日本における家族と住居の近代化過程をモデル化し、現代的視点からそのモデルの限界を明らかにするとともに、新たなモデルを提起している（文献5、文献6等）。広原は、人口学的アプローチによりマクロな視点から戦後家族の変容と住宅の近代化の検証を行っている（文献7）。

*5 千里NTに関する研究は、これまで様々な調査が実施されており、経年変化を扱った総合的な報告書としては、文献8）、文献9）等がある。しかし、建設当初から現在に至る居住変化を追った縦断的研究はみられない。

*6 例えば、文献10）、文献11）、文献12）等。

*7 文献13）による。

*8 文献14）による。

*9 千里ニュータウン21研究会が、1996年12月に実施した。ニュータウン内住戸の約1割にあたる4,144票を配布し、999票を回収した。調査結果の概要は、『地域にひらかれた生活都市をめざして』（1998.3）にて公表されている。

*10 調査の詳細は、文献15）にて報告している。

*11 プラン採取とそのモデル化にあたっては、文献16）、及び『住まい文化の創造をめざして 積水ハウス30年の歩み』（1990）、『大和ハウス工業の40年』（1995）等社史や初期のパンフレットを入手、参考とした。

*12 文献17）による。

*13 文献18）による。

*14 人口学、マルクス主義フェミニズム、比較社会学の視点から精力的な取り組みがみられる（文献19）、文献20）、文献21）。

*15 文献22）による。

*16 このような企業戦士と専業主婦の生活は、鹿嶋（文献23）、文献24）に

具体的に描かれている。

*17 伊東はこれまで男女両性視点からジェンダー変容を論じてきた（文献5）、6）、22）等）。昨今、男性研究者による男性研究も取り組まれてはいるものの（文献25）、*14で取り上げた落合、上野、瀬地山も含めて「主婦」を対象とするジェンダー研究が大半である。

*18 文献26）による。

*19 文献27）による。

参考文献：

- 1) ハウジング・スタディグループ：現代住居の解釈、住宅総合研究財団、1992
- 2) 住田昌二：現代日本における住様式の変容過程—「LDK型住宅」と「続き間型住宅」の両モデルの検討、住宅の近未来像、学芸出版社、1996
- 3) 伊東康子・広原盛明：家族分野における都市住宅研究の現在—家族と住居、その学際的分野の研究について、都市住宅学第2号、pp. 22～24、1993. 6
- 4) 小林秀樹：現代住居における場の支配形態 住居における生活領域に関する研究その1、日本建築学会計画系論文集No. 468、pp. 65～74、1995. 2
- 5) 伊東康子：現代家族と住居のゆくえ—住様式の脱近代化に関する一考察、都市住宅学第6号、pp. 47～51、1994. 6
- 6) 伊東康子：ハウジングにおける家族モデルの再検討—その脱近代化をめぐる一考察、都市住宅学第11号、pp. 32～37、1995. 9
- 7) 広原盛明：家族・家庭生活の歴史の変容と住宅の未来、住宅の近未来像、学芸出版社、1996
- 8) 千里ニュータウン総合評価に関する調査研究委員会：千里ニュータウンの総合評価に関する調査研究、1984
- 9) 高齢化社会に対応した住環境に関する調査研究連絡会：高齢化社会に対応した住環境に関する調査研究報告書、1991
- 10) 吉田禎吾・蒲生正男編：社会人類学、有斐閣、1974
- 11) 続有恒他：心理学研究法 第11巻 面接、東京大学出版会、1975
- 12) 金子勇・長谷川公一：マクロ社会学、新曜社、1993
- 13) 有末賢：下町の世界、都市社会学のフロンティア2 生活・関係・文化、日本評論社、1992
- 14) 谷富夫編：ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために、世界思想社、1996
- 15) 伊東康子・高田光雄：千里ニュータウンにおける高齢者の親族関係とコミュニティ活動に関する事例研究、日本建築学会大会学術講演梗概集F-1、p. 269～270、1997
- 16) 日本建築学会編：構法計画パンフレット5 工業化戸建住宅・資料、彰国社、1983
- 17) ロバート・フィッシュマン、小池和子：ブルジョワ・ユートピア、勁草書房、1990
- 18) 大阪府：千里ニュータウンの建設、大阪府、1970
- 19) 上野千鶴子：近代家族の成立と終焉、岩波書店、1994
- 20) 落合恵美子：21世紀家族へ、有斐閣、1994
- 21) 瀬地山角：東アジアの家父長制、勁草書房、1996
- 22) 伊東康子：変容する現代家族のライフスタイルと居住ニーズに関する研究、都市住宅学第12号、pp. 78～88、1995. 12
- 23) 鹿嶋敬：男と女 変わる力学、岩波書店、1989
- 24) 鹿嶋敬：男の座標軸、岩波書店、1993
- 25) 伊藤公雄：＜男らしさ＞のゆくえ、新曜社、1993
- 26) 森岡清美：新しい家族社会学、培風館、1987
- 27) 住田昌二他：日本のニュータウン開発、都市文化社、1984

（1998年2月10日原稿受理、1998年6月22日採用決定）